

Title	並列表現形式の史的展開 : その体系的把握を目指して
Author(s)	岩田, 美穂
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/57856
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

論文内容の要旨

本論文は、主として平安末期以降、現代語にわたって日本語に見いだせる並列表現の歴史的な形成過程を論じたものである。ここで言う並列表現とは、具体的には「～たり～たり」「～なり～なり」「～（だ）の～（だ）の」「～やら～やら」「～とか～とか」という5つの形式で表現されるもので、1)「例示」という意味的特徴、2)語ないし句が並列されなければならないという構文的特徴、3)並列句がまとまってスルを伴った述語句を作ったり、並列句が名詞句として使用されるという統語的特徴をそれぞれ持つという性質によって規定される。

本体の構成は以下の通りである。「目次」「序論」に続く第1章「タリ型の変遷」は、「0. タリ型をめぐる諸形式」「1. 先行研究と問題点」「2. 平安末から室町期」「3. 江戸期」「4. 衰退の要因」「5. まとめ」を含む。第2章「ナリの変遷」は、「1. 現代語のナリ並列の特徴」「2. 実例観察」「3. 先行研究とその問題点」「4. ナリ並列句の変化」「5. まとめと残された問題」を含む。続く第3章「引用から例示へーノ・ダノ並列の変遷ー」は、「0. 現代語におけるノ・ダノ」「1. 先行研究と問題点」「2. 中世から近世にかけてのノ・ダノ」「3. ～ト構文と例示」「4. 統語的变化の方向性」「5. まとめ」「6. 補説ー「ノ」の出自ー」を含む。第4章「ヤラ・トカにおける例示用法の成立」は、「I ヤラの歴史的变化」と「II トカの歴史的变化」からなっており、前者は「1. 先行研究と問題点」「2. 例示用法の成立時期」「3. 他の用法と派生関係」「4. ヤラの変遷のまとめ」から、後者は「1. トカの問題点」「2. 用法の変遷ー例示のトカの成立時期ー」「3. 他の用法との派生関係」「4. 構文の発達」「5. トカの変遷のまとめ」からなっている。第5章「例示並列形式の体系的整理」は、「1. はじめに」「2. 各形式の変遷概観」「3. 名詞句への変化の方向性」「4. 文法史への位置づけ」「5. まとめ」からなっている。最後に「結論」「参考文献一覧」「調査資料及び使用テキスト」「初出一覧」を付す。A4判4+133頁、400字詰め換算で約410枚に相当する。

「序論」では、並列形式の定義を述べ、本論の目的・構成を示す。第1章「タリ型の変遷」では、タリ型並列句と近い関係にあるヌ型、ツ型とタリ型の歴史的・意味的關係について論じ、反復から例示へと意味変化したこと、語から句へという並列句の拡張が見られること、不十分終止用法から、様態副詞的な修飾句を経て、スルを伴った述語句となったことを示している。第2章「ナリの変遷」では、タリ型と同様に不十分終止から派生したナリ型が、注釈句から修飾句を経て名詞句、述語句に至ったこと、意味的には、共通要素の並列から要素の全部列挙、そして部分列挙(例示)へと進んだことを示した。第3章「引用から例示へーノ・ダノ並列の変遷ー」では、ノ並列句がトを伴う引用句から生じ、やがて名詞句に付加される形式を介して名詞句そのものへと発達したことを述べている。第4章「ヤラ・トカにおける例示用法の成立」では、ヤラによる例示用法が17～18世紀に成立し

【28】

氏名	いわたみ穂 岩田美穂
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第23482号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	並列表現形式の史的展開ーその体系的把握を目指してー
論文審査委員	(主査) 教授 金水 敏 (副査) 教授 蜂矢 真郷 准教授 岡島 昭浩

たこと、ヤラの例示用法は直接疑問から派生したこと、室町末期から江戸初期にかけてトカ句に選択の用法が生じ、江戸後期、例示用法が派生したこと等を述べている。第5章「例示並列形式の体系的整理」では、本論で扱った並列句の成立・発展が、Kinsui の言う“求心的な変化”の一種として位置づけられることなど、日本語によく見られる方向性の変化であることを論じている。

論文審査の結果の要旨

本論文で言う並列表現形式は、存在は知られていたものの、個別の形式ごとにばらばらに論じられてきており、その扱いも極めて軽いものにすぎなかった。これに対し本論文は、出自の異なる5形式をその意味的・構文的特徴から同一統語・構文的形式として括りだし、その歴史的形成・発展過程を包括的に描き出した。語彙・形式単位でなく、このような特定構文を単位としてその歴史を文献に基づき解析するというタイプの、いわば本格的な歴史統語論・歴史構文論というべき論文は、いままでにも決して多くなく、その点でまず高く評価できる。なぜ多くないかと言えば、統語・構文形式は、音韻や語彙にもまして抽象的で、その抽出・認定に高度な理論的判断が必要とされ、しかも多種多様な国語史資料を読みこなして用例を的確かつ網羅的に摘出することに多大な労力が必要となるからである。申請者は、これらの理論的基盤、資料の読解力において高い水準を示し、この困難な課題を乗り越えることに成功した。しかも、その到達点は、文末形式が注釈、修飾形式を経て名詞句に至るという、日本語の統語・構文的变化の方向性についての重要な発見として示されており、本論文の成功が今後の研究に与える影響は決して小さくないと見られる。

とはいえ、本論文に課題が無いわけではなく、個別の説明の不整合な点、先行文献と関係の不明な点、不十分終止その他関連する形式との関連の追及の不足などいくつか指摘できるが、これらは達成された成果に対してさほど大きな瑕疵とは言えない。

なお、2010年2月16日に本論文の公開口頭試問を行った。この点もふまえ、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。